

現象的概念戦略の批判的検討

若林佑治(Yuji Wakabayashi)

東京大学総合文化研究科

本研究発表では、意識のハードプロブレムに対する物理主義的アプローチの一つに位置付けられる、現象的概念戦略の批判的検討を行う。意識のハードプロブレムとは、「私たちの意識経験になぜ、主観的な側面であるクオリアが伴うのか」という問題である(Chalmers 1996)。意識のハードプロブレムの背後には、説明ギャップ(Levine 1983)と呼ばれる現象が存在している。説明ギャップとは、意識経験とそれを担う物理的状态あるいは機能的状態との間に存在するように思われるギャップであり、クオリアの物理主義的説明を困難にしている。たとえば、赤いものを見ることによって引き起こされる、赤のクオリアを伴う視覚経験が脳状態 R によって担われているとする。このとき、脳状態 R によっては、その経験になぜ緑のクオリアではなく赤のクオリアが伴うのか、あるいはそもそもなぜクオリアが伴うのかということの説明できないように思われる。意識のハードプロブレムは、説明ギャップから生じてくる問題であると考えられる。

本研究発表でのテーマである現象的概念戦略は、説明ギャップの存在を認めつつ、それを物理主義的観点から説明することで、意識のハードプロブレムへとアプローチする。現象的概念戦略によれば、説明ギャップは現象的概念と呼ばれる概念の特殊性に由来している。現象的概念とは、意識経験を内観によってとらえるときに用いられる概念であり、指示対象である意識経験を直接的にとらえる概念であるという意味で、特殊な概念であると考えられている(Chalmers 2003, Balog 2012 など)。たとえば、赤の経験を内観し、その経験を指示する現象的概念を用いることで、その経験は、「赤を見るとはどのようなことか」という一人称的観点から直接的に捉えられる。一方で、同じ経験を内観によってではなく、三人称的観点からとらえる場合においては、その経験を指示する概念と指示対象である意識経験との間には、現象的概念を用いるときのような直接的な認知的関係は存在しない。現象的概念戦略によれば、同一の経験を指示する 2 つの異なる種類の概念の存在によって、説明ギャップが生じている。つまり、説明ギャップは概念の指示対象間のギャップではなく、概念の間のギャップとなる。

現象的概念戦略が直面する課題は、現象的概念が持つ以上のような特殊性を、物理主義的観点から説明することである。現象的概念の説明としては、これまでにいくつかのものが提出されてきているが、中でも有力な説明であると考えられるのが、現象的概念が部分的にその指示対象である意識経験によって構成されるという説明である。本研究発表では、

現象的概念の以上のような説明を支持するパピノー(Papineau 2002)やバログ(Balog 2012)による研究を詳細に検討し、その問題点を明らかにすることで、現象的概念戦略によって説明ギャップを克服することは困難であることを示す。